

池田 卓 著

『不便が残してくれたもの——西表島・船浮からのメッセージ』

評・中井淳也（日本の離島文献情報サイト「島の図書館」編者）

書評

西表島の船浮出身のシンガー・ソングライターである著者は、自身の故郷について、「そこは『陸の孤島』『離島の離島』と言われ、西表島内にありながら道路交通網から孤立し、道の最終地点から船でしか渡ることができません。四十人が暮らすのどかな集落に、小中学校はありますが、児童はたったの二人」と語る。

那覇から船浮へ里帰りして一〇年になる著者は、子どもの頃に祖母が教えてくれた「無いものねだりより、あるものに感謝しなさい」という言葉をヒントに、船浮の《あるもの》に目を向ける。そこで気がついた「不便が残してくれたもの」の数々を、自然とともに生きる暮らしの風景と合わせて紹介したのが本書だ。

「壊れた」ではなく「調子が悪い」という表現を好んで使う父、二つ隣の集落にあるスーパードに電話で買い物をしてきた祖母、小さな学校の大運動会やイノシシ猟、旧暦と潮の満ち引き、「西表のターザン」と呼ばれたオジイ——船浮を舞台に描かれるエピソードは、じつに多彩でいずれも興味深い。

亜熱帯の森と海に囲まれた船浮の魅力もさることながら、

尊敬する両親をはじめ島の先輩たちの生き様に迫り、離島に暮らす人々のものの見方をわかりやすく伝えているのも本書の特徴である。

「離島」と「都会」の対比も面白い。「都会と離島では、どっちが不便かという間違いなく離島の方ですが、どっちが不便を感じているかという話になれば、何もかも揃い、便利であることがあたりまえになった都会の人の方だと思うのです」との指摘は、離島で生まれ育ち、都会に出た経験も持つ著者ならではの視点ではないだろうか。

何事にも手間暇がかかる不便な島だからこそ得られるかけがえのない価値と、それが人の心にもたらす豊かさ。昨今、「不便益」という発想が提唱され注目を浴びているが、これは、不便だからこそ得られる価値や効用を意味する。

本書は、離島から「不便益」を世に問うた、ユニークかつ他に類を見ない一冊である。



令和2年3月
ポニーインク
定価：1,700円+税